名門大鈴木が残した……

――日本産業界を代表する錚々たる大会社――

（故　金子直吉さん）

三井、三菱、鈴木の名に天下を三分の大構想の下、関西財界に不抜の意気を挙げ、その名を後世に残した鈴木商店と金子直吉氏の不滅の足跡は、名門鈴木一家の偉名とともに、日本産業史上、『どっこい生きているぞ』の滅びぬ動脈を生かしている。即ち日商、帝国人絹、神戸製鋼、播磨造船所、中央毛織、日本発条、太陽鉱工など、その血脈は脈々と流れ新生日本の産業界に隆々たる発展を続け、大鈴木の伝統と大事業は絶えることなく堂々と躍動している――。

（故　柳田富士松さん）

〈太陽鉱工〉

社長　高畑誠一
専務　橋本隆正

日商株式会社の事業部門を継承して同系独立会社になった太陽鉱工は、これまた大鈴木系列の錚々たるベテラン会社で、鈴木鉱工部門は属する大東鉱山、赤穂製錬工場、仙台チタン工場を運営している。代表陣には社長に日商の高畑誠一、専務は鈴木生え抜きの橋本隆正と旧鈴木の直参組がその運営を動かしている力強い特殊大陣営で、特殊鋼モリブテンの生産はわが国生産の七〇％は当社が出しているわが代表的役割を演じ、チタン部門（仙台）はフェロチタニューム、大東の硫化モリブデン、赤穂の三酸化モリブテンなどは何れも極めて高率の品位をもち斯界からは注目されている。殊にモリブテンの世界的立場は各国から注目され、断然他社を凌駕する優秀さである。

しかも同社は最高陣営中に元会長鈴木岩蔵氏息治雄、金子家の金子文蔵、柳田家の柳田義一らの二世陣が重役陣に配されている。

〈帝国人絹〉

社長　大屋晋三

帝国人絹は昨年暮、会長社長が入替り大屋晋三氏を再び社長に、森社長が会長になり、専務一、常務五、取締役六の最高構成で全部常勤制をとり社運興隆への一大進軍を期することになった。大屋氏はテレリン技術導入のため自ら渡英その衝に当るなど絶倫の意気を見せ、菊池秋夫専務はベテラン揃いの米田、鳥居、相浦、田宮、古川の五常務を率い実務一切を指揮している

〈播磨造船所〉

社長　六岡周三

マンモスタンカー時代に入った海運造船界だ、――その造船界に話題を添えたのは昨年暮れ三菱造船と競合って六万六千トン二大巨船の受注に成功した播磨造船所六岡社長の経倫は業界人をあっといわせた。

従来、播磨は造船界では堅実型と思われていたのが、最近思いきって尖端をきって、タンカー播磨の真価を一段と高め六岡氏の名を高からめした。ヒット船日本最初の全溶接船クリン・タンカー新和丸、共栄丸を建造など躍進につぐ躍進である。当社は業界タンカー建造の草分け会社であり長年の技術と経験は、造船日本の代表的存在である。

六岡社長の下、伊藤、右田、田中三常務、森本氏ら六取締役の最高スタッフは今後も着実一途に躍進せしめるであろう。

〈日本発条〉

社長　楓英吉
専務　阪本寿

日本発条は資本金二億円、自動車車輌用バネは需要増を反映して好調で、最近の月売上は一億四五千万円を維持している。従って今期売上は予定通り十五億円を達成できよう、自動車業界の好況をうけて好調堅実の経営と相まって着実に内部蓄積を重ねている日商八十五万株神戸製鋼十五万株と何れも大株主だ。今回四億円に倍額増資した。

受注は漸増を辿り来期からの収益も向上しよう純益は五―八千万円で利益率二割三分見当で、原料高製品安も解消、七分増配一割分復配が確実化される有望会社で、日商系列下なかなかの会社である。楓社長、阪本専務何れも鈴木で薫陶をうけた逸材その他の最高陣何れも堅実な配陣である。

〈日　商〉

社　長　落合豊一

脈々たる大鈴木の血脈を、わが経済界に伝える日商株式会社は、わが国際貿易界の花形として往年の大鈴木を凌ぐ復興振りを見せて来た。

高畑会長、落合社長、前社長永井重役ら何れも神戸高商出身で、旧鈴木で育ったベテラン揃いであり、人材組織の最高布陣を見せ何れも頭脳と才幹、交友三十年表裏一体の間柄で、この協和力を結集した日商は、昭和二十六年四月一億円に増資して利率二十七割、六割配当を行って手堅い日商にしてはすばらしすぎるとまで注目をひいた積極策に星霜五年の間に資本金は一躍二十余倍今では一物丸紅、伊藤忠とその名を争う昔日の第一級商社として世界に君臨してニューヨーク、ロンドンでは日本的大商社「日商」の名に、わが国を代表している盛況を見せているのは、流石に慧知、大金子に劣らぬ名コンビ高畑、落合の快腕の驚くべき所産であろう。

高畑氏は、鈴木でも学校出の第一期生、入社七年でロンドン支店長となり、当時カイザーとまで異名をとった敏腕家だった。金子氏親しく薫陶して、入っては鈴木一家の支柱となった。落合社長は、同じく同門同系の逸物で殆んど高畑氏に相伴い鈴木系超一級の大物と評されている。既に日商は二十億の総資本により最良の商社として昔日の大目標、三井、三菱との三分への金子式モットーへ近づけようと先人の大気を追って内迫している。

高畑会長のもと、落合豊一社長に配するに宮口、長山、西川、中川、石谷、岡村の各常務、会長と同窓同期の永井前社長が平取として六常務七取締役制の円熟した日商政治は何れを見ても英、米に関連深いベテラン揃い、殊に長山常務は第一原子力グループで注目されている。

〈神戸製鋼所〉

社　長　浅田長平
相談役　田宮嘉右衛門

神戸製鋼所はいよいよ懸案の銑鋼一貫体制を確立して、高炉建設を企む長期計画に浅田社長は、大計画完遂のために経営陣の大異動を断行して注目を与えたが、外島新専務、安並、市川、曽我野の三常務、田子氏以下十平取の新構成で、特異な異動たる所以は、浅田社長ならでは断行できぬ。前副社長田子、町永両氏が平取に就任、常務外島氏が昇任したことだ。二十七年以来、浅田氏の大号令は業界の長老としての経営の上に断然大きな光彩を与え、浅田氏の号する如く銑鋼一貫を背景に、ドイツのクルップたらん――の意気に燃えたものである。めざすは『クルップ』の如き、鉄鋼と機械の中間大会社を大神戸に伸さんとするコンツェルン化の推進である。

全国六大メーカーの一つとして経営陣の総力は近代化設備の完成による強力化を期して総合経営の巨大化に躍進している。

〈中央毛織株式会社〉

社　長　多賀二夫

日商出身者で固まっている中央毛織は、現重役陣十二人のうち多賀社長をはじめ、八名までが日商で固めている。

中毛は、昭和十七年日商の稲沢、高石両紡毛工場を母体に設立されたもの、日商とは切っても切れぬ関係で今でも同社二百十二万株余の筆頭株主であり、当社六割前後の売上は同社で取扱われている。

社長多賀二夫は素晴らしくハラの大きい沈黙果断の人、日商取締役から戦後当社入りし紡毛から梳毛、紡毛の一貫会社として今日の地位を築き上げた功労者、日商高畑会長とは義従兄弟で多賀浦賀船渠社長は氏の実弟である。

猪原専務はナショナルシティバンク出の銀行人で、多賀、猪原の名コンビに社運隆昌の大道はおしひらいて進んでいる。

金子直吉翁掛軸

〈日塩株式会社〉

社　長　安東直市

日塩株式会社（社長安東直市、本社東京都千代田区丸ノ内二丁目八重洲ビル）も力強い発展を重ねている。昭和十六年大日本塩業から昭和二十四年日塩への改称をしてから資本金も三百万円から昭和二十八年三月四千万円に増資するまでの間、植木庚子郎氏を大蔵省から取締役会長として迎え、鈴木系太陽産業、東洋絹毛、帝国樟脳など重役として、快腕をふるっていた現安東社長は故金子直吉氏の秘書として令名を謳われた人で、その苦労人としての人の和の調和によって飛躍的な発展を遂げ、塩の輸入、加工、倉庫運輸、葉煙草及び農林水産物の輸出入などまったくすばらしい発展である。京浜、名古屋、神戸、仙台、札幌など十ヵ所の出張所も営々一丸となって活気ある活動が続けられて内外からも注目されている。

太平経済新報社
新産業新録特集号
（昭和三十八年頃）より